生きた歴史学習を取り戻す

鎌倉時代の人・物・事

玉川大学学術研究所特別研究員
多賀譲治

玉川大学学術研究所の多賀譲治特別研究員が、「暗記科目ではない、本来の楽しい生きた歴史学習を取り戻すために」として、鎌倉時代に起きた出来事を基にしながら、教材研究・授業デザインのヒントを示す。

その1

袖に刺さった名入りの矢

吾妻鏡に息子の命乞い切々と

治承4（1180）年11月26日、老女が頼朝のもとにやってきた。愛息の瀧口三郎経峻が斬首されると聞いたからだ。老母は瀧口家が代々源氏に仕え忠義を尽くしてきたこと、平治の乱では義朝のために六条河原で討ち死にした者がいたこと、経峻が石橋山合戦で平家方についたのは形だけで、平家方についた者のほとんどが後に許されたことなどを切々と訴え、泣きながら息子の命乞いをした。

頼朝は老母の話を静かに聞いていたが、やがて土肥実平に1つの唐櫃を持ってこさせた。中には鎧が入っている。その袖口には1本の矢が刺さっていた。

「これは石橋山合戦で経峻の矢を受けた私の鎧である」と頼朝は静かに語った。そして「瀧口三郎藤原経俊」と鮮やかにその名が書かれていた部分を切り取って老母の前に置いた。息子が石橋山で頼朝を狙った明白な証拠がそこにあった。老母は無言で泣いた。そして寂しく首をうな垂れて帰っていった。

この後老母の嘆きに心を動かされた頼朝は、瀧口家のこれまでの功労も考慮に入れ、経峻の死罪を免じたのであった。

吾妻鏡は臨場感あふれた文章でこの場面を書き記しているが、教材研究を行う観点からはいくつか興味のある事柄を読み取ることができよう。

第1はなんといっても矢に名が書いてあったことだ。武士の訓練は「弓馬の道」と言われるが、当時の主たる武器は弓だった。敵将の首級を取るのは大きな戦功で、相手の位と状況に応じて恩賞の多寡も変わる。頼朝の体に矢が刺さりダメージを与えた場合、仮に他の武士が頼朝の首級をあげたとしても、第一矢を放った経峻には当然のこととして恩賞が与えられる。この場合の恩賞とは新たな領地。そのときの証拠になるように武士は自分の矢に名を書いて戦に臨んだ。

第2は石橋山の合戦で頼朝に敵対した武士の多くがその後許され、ほとんどが領地を安堵されたということだ。もともと頼朝の旗揚げは伊豆・相模を中心とした豪族（武士）による「京都支配」からの権益奪還運動である。東国の豪族が頼朝を中心として一丸となるためには強い結束が必要で、姻戚関係で強く結ばれている武士団を安易に断ち切れなかったのである。武士はどちらが勝ってもいいように、親子兄弟・親戚で分かれてそれぞれについた。どちらが勝っても負けた家族の助命嘆願を行い、最悪でも家を残すことができたからだ。頼朝追討軍の現地司令官だった大庭景親ですら、兄の景能は頼朝側として戦っている。戦後、さすがに景親は斬首されたが、景親とともに戦ったもう1人の弟俣野五郎景久は景能の命乞いで助かっている。よって大庭の領地はその後も安堵された。ちゃっかりしているといえばそれまでだが、鎌倉時代を通してごく普通にあったことである。鎌倉時代の武士は江戸時代と大きく異なり、主君に対する献身的な忠誠心はさほどない。よく言えば合理的、悪く言えば損得勘定で動いていたということになる。敵味方に分かれて戦うのは、いわば保険をかけておくようなもので、彼らにとって最も大切なのは忠節を尽くすことではなく、一族の繁栄とそれを支える領地を守ることに尽きる。一所懸命の地を守り抜くためには手段を選ばない。これこそが一族を支える最も武士らしい姿といえたのである。

私たちは授業の中で「ご恩とは領地のこと」「奉公とは戦争で戦い、役人として働くこと」と説明しているが、それで本当に教え切れているのだろうか？保元の乱をはじめ、親子兄弟で分かれて戦った数々の戦いの意味をきちんと理解させているだろうか？

歴史嫌いの子は案外多い。理由は「年号や人名が覚えきれないから」。どんな教科でも、教科書の内容はあくまで学習の指針だ。子どもたちが「おもしろい」「もっと知りたい」と思う良い授業を作るには、教師自らが「調べ」、教師自身が「歴史観」を持たなければならない。そうすることによってはじめて、1行の記録、1つの出来事から様々なことが読み取れ、バラバラだった出来事が関連性を持って生きた情報になっていくのである。頼朝が証拠の品を残しておいたこと、温情を見せたことも授業の肉づけに役立つエピソードである。